

子ども会（学習会）だより

MY SKY No. 21



1997年10月14日火曜日発行（毎週火曜日子まぐれ発行）

発行者

板野中学校

学習会

編集・文責：吉成正士

「自分の言葉に嘘はつくまい 人を裏切るまい」

この歌詞だけを見て、ピンときた人はすごい！私の好きな歌の中にあるフレーズです。アリスの「遠くで汽笛を聞きながら」という歌なんですが、何かでくじけそうになったときに必ず口ずさんでしまうフレーズなんです。そんな歌が、みなさんやみなさんのお父さん、お母さんにも何かしら一つくらいあるのではないのでしょうか。

歌とは心の叫びともいえます。心のこもっていない歌は、いくらきれくても人の心をつつことはできません。逆に心がこもっていれば、どんなつたない歌でも人の心を揺さぶります。歌ってそんなものではないのでしょうか？



第4回板野中学校同和教育研究会(兼板野町同和教育研究会「中学校部会」)

★ 資料「一本の大根として」(10月15日；板野中学校体育館)

いよいよです。2年C組のみなさん。そして全校生徒のみなさん。先に歌のことについて少し触れましたが、実は板中同研が来る度に、私は冒頭のフレーズとともに「サライ」を思い出すのです。あの谷村新司の「サライ」です。第一回板中同研の時、授業の前にこの「サライ」を歌って始めました。いろんな訳があつてこの歌を歌うことになったのですが、結果的にそれが良かったようです。たくさんの生徒のみなさんが発表し、心でつながっていきました。発表できなかつた子もいました。でも、それはそれで構わないと思いました。たとえ発表できなくても、心がつながっていたから。もっと昔は、「全員発表」を目標にしていたときもありました。それはそれで悪くなかつたと思います。でもそのことで発表できなかつた子が苦しい思いをするのであれば、それは間違いだと思います。要は、この機会により多くの仲間とのつながりを広げ、深めることなのだと思います。そして気持ちよくなることだと思います。

待ちに待った今日25日の全体学習。昨日の夜からドキドキしてお母さんや姉に“どうしよう、どうしよう”と言うばかりでした。

いよいよ本番。体育館に入ってイスに座って周りを見わたすと人、人だらけで緊張感が高まりました。私は友達と“緊張するッ”とか言っていたけど「サライ」を歌い

だしてからまったくというほど緊張感がなく、いつも教室で授業をするような感じになり、^は恥ずかしくもありませんでした。

今日一番うれしかったことは、あんなに人がたくさん来ている中、発表できたことです。今日の朝、お母さんや姉に“絶対発表してくるけん、絶対”と言って学校へ来ました。私は発表するときそんなに勇気もいらなかったし、言いたかったのでスッと手を挙げました。去年は全体学習のとき、緊張しまくって手も挙げられなかった私が、今年は勇気もいらず手を挙げられた自分がすごく不思議です。

Mちゃんの発表のとき、ザーザードシャドシャ雨が降っていたのに、Mちゃんの涙の発言のときピタッと雨がやみ、パッと明るい^ひ差しがみんなを^て照らしました。私はその時涙を流して発言したMちゃんに対して、お日さんが雨に勝ってパーっと明るくなってMちゃんに元気づけてくれるっていうか、^こんててくれたっていうかそんな気がします。私はそのことでKちゃんといろいろ話をしました。

私思うけど発表できたのは^{ばん}班のみんなのおかげだと思います。みんな“発表しよ”とか“発表するけんしてよ”とか言うと自然に手が挙がります。私は班を作ったことはとてもいいことだと思います。

もう本当に今日はいい日でした。森口先生が“時間があつという間にすぎるぞ”って言っていたことは、本当にそうでした。あつという間に時間がすぎました。私にはもっと時間がほしかったです。すごく短く感じました。

本当に今日は、すばらしい大好きなとてもステキな一日でした。拙著「いしづえ」より

これは第一回板中同研の時、私のクラスの生徒が^{よくあさ}翌朝に出した感想です。^{ひご}日頃からそんなに発表できる子ではありませんでした。でも、たまたまこの子はその日発表できました。それは、たまたまなのです。

もっとすごい子もいました。次の文章は、その年の4月の参観日のときの感想です。

「峠」について——。

初めての参観日はそれだった。

私は道徳の時間、きっと手をあげないと思います(1年間)。

でも、何も考えてないわけじゃないことを言っておきます。考えているんです。

みんなより、たくさん、たくさん考えている自信があります。

でも……、考えているときは発表しません。だから、発表しません。

わかってほしいです。

拙著「いしづえ」より

こう断言^{だんげん}されて、正直^{しょうじき}私は一瞬^{いっしゅん}とまどいました。でも「発表しないならそれでもいいや。無理にさせるものでもないし……。したくなればそのうち放^{ほう}ついてもするだろう」とのんきに構^{かま}えていました。それが、板中同研の時に、突然^{とつぜん}手を挙げたのです。これは、授業していた私がビックリしました。次の文章は、翌朝彼女が詩を書くように書いてきた感想です。

何から書いていいのかわからない……。

今時計を見上げると、もう8時になりかけている。

いつのことだったろう。私の手が空気を割いたのは……。

私はあのとき何を言った？どんな顔で？先生の表^{ひょうじょう}情^{じょう}は？クラスメイトの反^{はん}応^{おう}は？何も覚^{おぼ}えていない……本当に。ただ胸^{むね}が熱^{あつ}かったことだけが思い出される。

ちょっと人が集まるとすぐ緊張してピクピクする。ちょっと暗いと風の音までこわい小^{しょうしんもの}心^{しん}者の私。そんな私が、中学校に入って部落問題学習をする中で初めて手を挙げた。話した。何が私を変えたのか、私にはわからない。言いたいのは、書きたいのはこんなことじゃない。こんなことじゃないけど、今は許^{ゆる}してほしい。次から次へとこぼれ落ちてくる涙がそう言っている。

先生、聞いてください。私の心の叫^{なげ}びを、耳をすまして聞いてください。

Mちゃん、Rちゃん、Aちゃん、Yちゃん、Mちゃんありがとう。板野中学校2年E組のみんな本当にありがとう。板野中学校のみんなありがとう。先生たちありがとう。今日聞いていた人たちありがとう。そして私を導^{みちび}いてくれた先生、ありがとう。私は自分の居場所^{いばしょ}を見つけました。ここに数万回のありがとうを書きたい。あの場所にいた人の名前をすべて書きたい。私はこの思いを忘れずに残しておきたい。

私がいつか大人になってわが子に話すべき時がきたら、あの時の空気の色を教えてあげたい。マイクを切って座った瞬間のあの気分を教えてあげたい。

今の私はまだうまく書き表わせないけど、まだとても小さいけれど、今日ここに、板野中学校2年E組にいられたことが、私の喜びであり誇^{ほこ}りです。拙著「いしづえ」より

発表に関して言えば、先生のアプローチも大切だとは思いますが、でももっと大切なのは、同級生のアプローチなのだと思います。同年代の仲間^{かか}との関わりが、決定的な影響^{けつていき}力^{ちから}を持つのだと思うのです。そんなつながりがもてるような場面を作り出すのが、私たち教師の務^{つと}めではないでしょうか。今回の板中同研がそのきっかけの一つとなれば、もうそれで十分だと思っています。参会しているのみんなの力で、どうかこの一瞬^{いっしゅん}を、ステキな時間にしま

しょう!

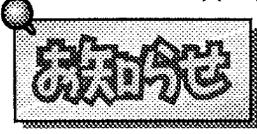


まず聞くこと!つながること!そして、思ったままをそのままに!以上!

★☆☆ ★★★ ☆☆☆☆ ★★★★★ ☆☆☆

- 10月15日(水) 第4回板野中学校同和教育研究大会兼板野町同和教育研究大会「中学校部会」(13:30~;本校)
- 23日(木)~27日(月) 板野郡秋季新人体育大会
- 25日(土) 老人ホーム祭(10:00~;板野町老人ホーム)

★☆☆ ★★★ ☆☆☆☆ ★★★★★ ☆☆☆



以前PTAの会で話をしていたとき、「同和教育の会に行けるなら行きたいと思うんだけど、いつあるのかわからない」と保護者の方に言われたことがありました。うれしいことです。結構他の町

では、PTAや地域の方々も参加しているので、板野町もそうなればと思っていたのです。行ける方、興味ある方、ぜひ一緒に参加してみましょ!きっと何か得られると思いますよ!詳しくは、中学校の阿部または吉成までご連絡ください。

- 10月15日(水) 第4回板野中学校同和教育研究大会兼板野町同和教育研究大会「中学校部会」(13:30~)
- 10月16日(木)・17日(金) 第48回徳島県同和教育研究大会(文化センター他)
- 10月18日(土)~20日(月) 部落解放第31回全国集会(アスティ徳島他)
- 10月22日(水) 第27回中学校同和教育研究大会(相生中学校)
- 10月24日(金) 文部省指定同和教育研究大会(三好中学校)
- 10月28日(火) 徳島県PTA指導者研修会(10:00~;文化の森県立図書館)
- 11月6日(木) 第41回板野郡同和教育研究大会(吉野町)
- 11月16日(日) PTA参観人権フォーラム(本校体育館)
- 11月29日(土)~12月1日(月) 第49回全国同和教育研究大会(熊本県)



第4回板野中学校同和教育研究大会 (97. 10. 15)

同和教育講演会録

『私の歩んできた道』⑤

「新しい部隊に転属してもこんなことの繰り返しになるのなら、もう一度人生を別の世界でやり直そう」

そう思い、そのことを家にいる妻に話しました。

「妻は、私が自衛隊をやめることに反対しました。三人の子どもを抱え家庭をあずかる妻として、自衛隊をやめても次の職場もしっかりしていかない、そんな不安定な私についてくるだけの勇気がなかったのだと思います。妻の言い分も私は聞き、

「それもそうだ。ついてこいと言うからには、ついてくるだけの力を私自身につけてから、準備をしてからでないといけない。今はその時じやない」

と私も反省し、また職場に戻りました。周りの視線を気にしながら、同僚のこそそ話を

「自分のことではないか」

と励みながら小さくなって毎日を過ごしている、そうした自分を見つめていく中で私は、

「このまま定年まで続いたんでは、いくら退職金が魅力とはいえ、私の体の方が参ってしまおう」

と思いました。私は

「この場から離れんといかん」

と思いました。昭和五十四年に入隊して以来、差別から逃げようともがいて、それでも逃げることでできなかった二十二年間に、妻の反対を押し切って終止符を打ちました。

妻と子どもを連れ、退職と同時に私の生まれ故郷である愛媛県H町に帰って参りました。私の小学校のときの母校である学校に、三人の子どもたちは転入しました。

この小学校はちょうどその頃、文部省指定の同和教育研究指定校になっておりました。ですから、毎年に比べて非常に参観日が多く行われていました。私は、

「参観日は絶対何をやめても参加しよう」と

という気持ちをもっていましたから、仕事を休みながら参観日にはいつも出席をしておりました。しかしその学校では、参観日の後、クラスごとに分かれたり体育館に集まったりして、学校同和教育の研修が行われていました。私はその頃同和という言葉が嫌いで嫌いでたまりませんでした。

「同和とは私の立場のことをいうんだな。私の生まれた所のことを同和というんだな」

そう思っておりました。ですから、「学校同和教育といった、同和という

用語のつくその研修会には参加したくない」

という考えが、頭からありました。参観日が終わるといつも、周りの視線を気にしながら、こそこそと逃げ帰って参りました。

そんな参観日のあるときに学校に行くと、校長先生にばつたりと出会いました。呼び止められてすぐ、

「校長室に来い」

と言われました。その時に、

「これを読まないか」

と言って一冊の本を渡されました。それが同和教育の本でした。私はその本を家に持ち帰り、

「嫌な本だな」

と部屋の隅に放り投げておりました。

しばらくたって、

「もうこの本もぼつぼつ返しに行かないかん」

と思つたとき、

「もし校長先生から内容について聞かれたとき、何も答えられないのもしやくに障る」

と思いました。

「どこかちよつと読んでおこう」

と思いついてページをめくつたのが、私がかの問題に関わる最初のチャンスでした。その本を全部読み終わりました。そして学校にその本を返しに行つたとき、

校長先生が、

「みんなで明るく気持ちよい学校生活を送るために、小学校での学校同和教育の取り組みはまず、みんなの手を洗うことから取り組んでいます」

と言われました。私はその時、意味が分かりませんでした。

「同和教育と、みんなが手をきれいに洗いましょうという取り組みと、どんな関わりあいがあるのだろう」

と私はピンときませんでした。横に立つておられた同和教育推進員の先生が、

「小学校ではみんなが手をつないで遊戯をすることも多いし、給食の準備等手を使うことが多いので、汚れた手がそういう作業をして、そのことがいじめにつながっていかないためにも、みんなが気持ちよい学校生活を送るために最初のスタートとして、そういう取り組みから始めている」と言われました。その時私は、少し分かつたような気がしました。

「同和教育は私たちのためだけの教育だ」

と思つていました。

「周りの人たちはそれをさせられてい

るんだ」

というように気持ちもありました。しかし同和教育はみんなに必要な教育なんだというようにことが、少し分かつたような気がしました……

つづく